

111. 肝炎の経過と Au 抗原および Au 抗体の意義

岡山大学 第1内科

湯本 泰弘 難波 経雄 田中 義淳
野崎 肇 内藤 紘彦 山田剛太郎
辻 孝夫

目的:

Au 抗原陽性の肝疾患患者の Au 抗体の変動を観察し、肝炎の遷延化、慢性化にいかに関与しているかを検索する。

方法:

対象は Au 抗原および抗体の検索は肝組織診断の確定した劇症肝炎10例、急性肝炎67例、亜急性肝炎5例、慢性肝炎157例、肝硬変72例の血清につき Abbott 社製の Coated tube を用いた solid phase radioimmunoassay によって行なった Radioimmunoassay 法による Au 抗原測定のために北里大学高橋技官から5分与された精製純化抗原を標準液として Au 抗原量を決定した。

成績:

慢性肝炎遷延化の Au 抗原量は、いわゆる healthy carrier, chronic carrier に比較して1/4以下の場合が多いが、その後の予後とは関係しない。Au 抗原陽性の慢性肝炎、肝硬変では Au 抗体価はいわゆる healthy carrier, chronic carrier に比較して高いものが多く、Au 抗原陽性、抗体陽性の慢性肝炎非活動型例、また Au 抗原陰性、An 抗体陽性で抗補体因子 (Ac) 価の高い肝硬変症もみられた。Au 抗体価の 10000cpm 以上を示す例にかぎって検出率を検討すると、急性肝炎回復期 (20%)、慢性肝炎 (31%)、肝硬変 (19%) にみとめ慢性肝炎、肝硬変に抗体が多いようであった。

これらの群の Au 抗原は低値ではあるが陽性のものが多く、Au 抗原あるいは Au 抗体が持続する場合は、どちらの場合にも予後が悪かった。

結論:

Au 抗原陽性のいわゆる healthy carrier, chronic carrier 例では Au 抗原量は Au 抗原陽性の慢性肝炎、肝硬変症に比較して多く、逆に Au 抗体量は慢性肝炎および肝硬変症例の方が前者に比較して高い値を示す場合が多く、Au 抗体それ自身の意味も必ずしもウイルスの中和抗体のように一元論的には説明できなかった。

112. 各種肝疾患における α -Fetoprotein の Radioimmunoassay について

広島大学 第1内科

川上 広育 国政 徹明 相光 汐美
中村 正義 大橋 暉 山下 征紀
三好 秋馬

研究目的:

原発性肝癌の血中には α -Fetoprotein (AFP) が特異的に出現し、この蛋白を証明することはその診断に極めて効果的である。従来われわれは M. O 法にて施行してきたがその検出度は、原発性肝癌21例中13例 (61.9%) 陽性でその検出度は低く、その向上の必要性を痛感していた。この度 RI 法にて、各種肝疾患では妊婦血清中の A. F. P を測定し、その臨床的意義について検討を加えた。

方法:

2抗体法 (ダイナボット社製) にて測定した。

成績:

正常者は全例 0-10m μ g/ml、急性患炎では (発症時) 40m μ g/ml 以下であり、激症肝炎 (1例) では高値を示した。肝硬変症では25例中5例に 40m μ g/ml 以上、原発性肝癌21例中17例 (80.9%) 700~2400m μ g/ml と高値を示した。転移性肝癌4例の内2例は 300~500m μ g/ml を示した。その内の1例は胃癌より、他の1例は結腸癌よりの肝転移したものであった。妊婦血清では12例中8例 (66.6%) に 70~250m μ g/ml と比較的高値を示した。急性肝炎の経時的变化では発症時は 40m μ g/ml 以下であり、その極期 (GOT, GPT.) をすぎる頃より、100~180m μ g/ml と比較的高値を示すものの短期間にて低値を示す傾向を認めた。

結論:

R. I 法での AFP により原発性肝癌の診断率の向上を認めるもなお AFP 陰性を示す例が存在することが判明した。しかし一方、他の肝疾患および妊婦血清中にも証明されることより、その特異性は消失したが、本法使用により、(特に経時的に) 肝癌での制癌剤による治療効果および、他の肝疾患での病態解明に寄与するものと考える。